

# 幼児の仲間関係と行動特徴に関する縦断的研究

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成10年 4 月30日受理)

## A longitudinal study of peer relations and behavioral characteristics in young children

Kenichi MAEDA

日常の仲間遊びや仲間相互作用場面において、どのような社会的行動や対人行動を示しているかは、子どもの仲間関係や社会的適応を左右する重要な要因である。相手に注目する。ほめる。援助を申し出る。微笑む。会話を始発する。身体的または言語的に好意や受容を表現する。仲間の行動を模倣する。おもちゃや遊具を共有する。相手の意見や援助を受け入れる。これらの肯定的な社会的行動は、幼児期の子どもにとって友好的な仲間関係を築き、関係を維持するのに有効な社会的スキルである。仲間の意見に従わない。協調や協力をしない。仲間の誘いを無視する。活動の邪魔をしたり、干渉する。他者の物を横取りする。相手を認めない。非難する。馬鹿にしたり、あざける。身体的な攻撃をする。言語的に脅す。無理強いする。これらの否定的な社会的行動は、仲間にとって嫌悪的であるので、嫌悪的な仲間関係、けんか、対立などを引き起こすことになる。子どもの仲間関係に関する従来の研究によると、仲間から好かれている人気児は肯定的な社会的行動を発揮し、仲間から拒否されやすい子どもは否定的な社会的行動を示しやすいと指摘されている (Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990 ; Hymel & Rubin, 1985 ; Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993)。

子どもの仲間関係と社会的行動特徴との関連を検討した研究では、主要な情報源として仲間や教師による様々なアセスメント情報、子ども自身の自己報告や面接調査情報、子どもの仲間相互作用を直接観察する行動観察情報などを利用している。これらの中で、行動観察法は他のアセスメント法よりも優れたいくつかの利点をもっている。第1に、行動観察データは、子どもの実際の相互作用について客観的な情報を提供するので、教師や大人による情報に内在する判断バイアスや主観性を最小限に抑えることができる (Hymel & Rubin, 1985 ; LaGreca & Stark, 1986)。第2に、行動観察測度はどのような社会的行動が仲間にどのような結果を与えるか、あるいは仲間からどのような応答を受けるかについて具体的な情報を提供する。

このように行動観察測度は子どもの仲間関係をとらえる有力な測度であるにもかかわらず、

従来の研究ではそれほど広く使用されてこなかった。Hymel & Rubin (1985) は、その理由として次の4点を挙げている。第1に、行動観察データの収集には時間、労力、経費を要する。第2に、子どもの発達に伴って仲間相互作用を観察することが難しくなる。保育園や幼稚園では自由遊び時間に仲間相互作用を頻繁に観察できるが、小学生以上の子どもではわずかな休憩時間や放課後の自由時間を観察するしかない。第3に、子どもの発達に伴って教師や外部者からは容易に観察できない行動が仲間関係を決定する重要な行動となってくる。第4に、子どもたちが観察されていることを意識して、自然な日常的行動を示さない可能性がある。本研究では、幼稚園の年少児から年中児にかけて、彼らの仲間相互作用を観察する。したがって、上述の理由の中で問題となるのは、第1の問題と第4の問題である。本研究では、第1の問題を観察者側の努力で克服することにした。第4の問題は、予め観察者の存在に慣れさせ、観察者を意識しない段階に達してから観察データを収集するなどの工夫で克服することにした。

ところで、幼児の仲間相互作用の観察研究では、一定の時期にソシオメトリック測度と仲間相互作用の行動観察を実施し、それらの同時的関連を検討したものが多い。それらの研究によると、以下のような結果が得られている。肯定的なソシオメトリック得点は肯定的な社会的行動と有意な正相関 ( $r = .61 \sim .70$ ) を示すが、否定的な社会的行動とは有意な相関を示さない。それに対して、否定的なソシオメトリック得点は否定的な社会的行動と有意な正相関 ( $r = .28 \sim r = .80$ ) を示すが、肯定的な社会的行動とは有意な相関を示さない (Hartup, Glazer, & Charlesworth, 1967)。肯定的なソシオメトリック得点は仲間遊び ( $r = .70, p < .01$ )、会話 ( $r = .51, p < .05$ )、平行遊び ( $r = .67, p < .01$ ) のそれぞれと有意な正相関を示すが、否定的なソシオメトリック得点は「いじめる・からかう」行動 ( $r = .57, p < .01$ ) や敵対的行動 ( $r = .69, p < .01$ ) と有意な正相関を示す (Vaughn & Waters, 1981)。肯定的なソシオメトリック得点は仲間に対する肯定的な社会的行動の働きかけ ( $r = .29$ ) や仲間からの肯定的な社会的行動の働きかけ ( $r = .28$ ) と有意な正相関を示すが、否定的なソシオメトリック得点は仲間に対する否定的な社会的行動の働きかけ ( $r = .34$ ) や仲間からの否定的な社会的行動の働きかけ ( $r = .41$ ) と有意な正相関を示す (Masters & Furman, 1981)。独り遊びや大人と接触する比率の高い幼児ほど、肯定的ソシオメトリック得点が低い関係にある (Goldman, Corsini, & deUrioste, 1980)。対象児から仲間への肯定的な働きかけや仲間遊びは人気児が拒否児よりも多いが、平行遊びは拒否児が人気児よりも多い (前田・泉, 1994)。それに対して、これらの測度や行動観察を一定の期間を経て2回実施し、両者間の縦断的関連を検討した研究は少ない。

本研究では、幼稚園の年少児から年中児にかけて、彼らの仲間関係、仲間アセスメントおよび行動観察による行動特徴のデータを収集した。本研究の第1目的は、ソシオメトリック評定法の仲間受容度 (平均評定値) に基づいて、年少児時点から年中児時点にかけて一貫して人気児を維持している人→人群と一貫して非人気児を維持している非→非群を抽出し、両群の行動特徴を縦断的に比較検討することである。第2の目的は、幼児全員のデータに基づいて、年少児時点から年中児時点にかけてソシオメトリック得点、仲間アセスメントおよび行動観察による行動特徴がどの程度安定しているかを相関分析を通して検討することである。あわせて、年少児時点と年中児時点における各測度間の同時的関連についても検討を加える。

## 方 法

**対象児** 幼稚園の年少児時点から年中児時点にかけての調査データが揃っている幼児18名（男児9名＋女児9名）を対象とした。年少児時点の平均年齢と年齢範囲は4歳6か月（4歳1か月～4歳10か月）であった。彼らは、年少児クラスから年中児クラスへ進級した20名の中から、調査データがすべて揃っているという条件に基づいて選出された。

**材 料** (1)幼児の個別カラー写真カード：ソシオメトリック指名法、評定法および仲間アセスメント指名法では、各幼児の個別カラー写真を使用した。写真は一人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5.5cm×横4.5cmの大きさにプリントしたものであった。各幼児の写真を縦7cm×横5cmの白色厚紙に貼りつけて個別写真カードを作成した。また、ソシオメトリック評定法では3つの分類箱を使用した。各箱は底面積が12cm×12cm、3つの側面の高さが5cm、残り一側面の高さが12cmの蓋のない容器形であった。各箱には高さ12cmの側面の内側面にそれぞれ3色の画用紙に描いたハッピーな顔（ピンク色）、ニュートラルな顔（黄色）、悲しそうな顔（青色）の表情略線画を貼り付けてあった。

(2)仲間アセスメント項目：年少児時点と年中児時点とも、表1に示す12項目を使用した。

表1 仲間アセスメント項目と質問内容

項目	質	問	内	容
1.	みんなが遊んでいるとき、一人だけ何もしないで、ぶらぶらしている子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
2.	自分の思うとおりにならないと、すぐに怒ったり、ふくれる子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
3.	一緒に遊びたいときに「入れて」と上手に頼んだり、「おもちゃ」を貸してほしいときに、「貸してね」と上手に言える子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
4.	（男：「～するな」「～してこい」「～せーや」）、（女：「～したらいかん」「～してや」「～してきてや」）というふうに、お友達にえらそうに、よく命令する子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
5.	お友達に何か頼まれたら、ニコニコ笑顔で「いいよ」と言って、すぐにしてあげる子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
6.	一緒に遊んでいるとき、だまって、どっかへ行って、いなくなる子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
7.	やり方がわからないとき、「これ、どうするの」って聞いたり、友達の言っていることがよくわからないとき、「何したいの」とか「これするの」と上手に聞ける子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
8.	自分からお友達にあまり話しかけない子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
9.	お友達と、すぐに言い争いやけんかをする子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
10.	小さな声で話すので、何がしたいのかわからない子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
11.	「〇〇ちゃん」と名前を呼んでから、話しかけてくれる子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			
12.	ブランコの順番や遊びの約束を守らない自分勝手な子がいます。こんな子は、〇〇組さんの中では誰かな？			

**手続き** 年少児時点の2月に、幼児に対するソシオメトリック指名法、評定法および仲間アセスメント指名法を個別に以下の順序で続けて実施した。年少児時点の行動観察は3月に実施した。また、年中児時点の個別調査は6月に、行動観察は5月～6月にかけて実施した。

(1)写真と名前の確認：各対象児と同一クラスの同性仲間全員の写真カードをほぼランダムに

配列して対象児に提示した。仲間の写真カードを1枚ずつ指さし、「この子は誰ですか?」と写真の仲間名を質問して仲間の名前と写真を一致させ得るか否かを確認した。仲間の名前を思い出せない幼児には仲間名を教えたが、ほとんどの幼児は仲間の名前を言えた。

(2)ソシオメトリック指名法：対象児を除く同性仲間全員の写真カードを机上にほぼランダムに配列し、次の教示を与えて肯定的指名を3名以内まで選ばせた。「この中で、〇〇ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番(2番目に、3番目に)一緒に遊びたい子は誰ですか?」肯定的指名が終了した後、同様の手順で次の質問をしながら、否定的指名を3名以内まで選ばせた。「今度は、この中から〇〇ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番(2番目に、3番目に)一緒に遊びたくない子は誰ですか?」

(3)ソシオメトリック評定法：まず机上に3つの分類箱を横一列に配置した。対象児から見て、右側にハッピーな顔の箱、左側に悲しそうな顔の箱、中央にニュートラルな顔の箱を置いた。ニュートラルな顔の箱を中央に置いた方が分類しやすいと考え、どの対象児にも箱の提示位置を一定にした。対象児を除く同性仲間全員の写真カードをほぼランダムな順に束ねた後、次の教示を与えて写真カードを1枚ずつ対象児に手渡していった。「今度は△△組のお友達の写真を1枚ずつ〇〇ちゃんに渡します。〇〇ちゃんは、写真のお友達をよく見て、〇〇ちゃんが幼稚園で一緒に遊びたい子だなあとと思ったら、この箱(ハッピーな顔の箱)に入れて下さい。遊びたくない子だなあとと思ったら、この箱(悲しそうな顔の箱)に入れて下さい。遊びたいか遊びたくないかわからないなあとと思ったら、この箱(ニュートラルな顔の箱)に入れて下さい。それでは、この写真の子はどの箱に入れますか?」

(4)仲間アセスメント指名法：同性仲間全員の写真カードを机上にランダムに配列して提示した。その中から対象児自身の写真カードを取り出して対象児の左横に置き、残りの写真カード全部を指さしながら、次のように教示した。「ここに、△△組(対象児の組名)のお友達の写真がありますね。これから、△△組さんの中で、こんなことするお友達は誰かな?と〇〇ちゃんに聞いていきますから、わかったらその子の写真を指さして教えてくださいね。」この後、表1の各項目について質問しながら、それぞれの項目に該当すると思う仲間の写真カードを3名以内ずつ選ばせた。その際、対象児が指さした仲間の写真カードはその都度裏返して置き、残りの写真カードの中から2番目、3番目の仲間写真カードを選ばせていった。

(5)行動観察：年少児時点の観察は、幼稚園の自由遊び時間に、対象児1人当たり1回5分間の観察記録(筆録)とビデオ撮影を4回ずつ計20分間実施した。年中児時点でも同様の観察を実施したが、観察時間と回数は幼稚園や日程の都合により、対象児1人当たり1回6分間の観察を3回ずつ計18分間実施した。観察にあたっては、対象児1人につき観察記録者2名とビデオ撮影者1名を割り当てた。いずれも女子大学生であった。18名の幼児について1回目の観察(5分間または6分間)が一通り終了した後で、2回目の観察を開始するという順序で、4回または3回の観察を実施していった。ビデオ撮影者は、対象児の遊びの様子や遊び相手がわかるように、少し離れた位置から対象児とその周辺の幼児たちを含めて撮影するように心がけた。観察記録者は、対象児の会話が聞き取れる位置に近づき、対象児の会話や表情を中心に筆録した。なお、幼児たちが観察者やビデオ撮影を意識すると自然な行動を示さない可能性があると考え、1回目の観察に先だって数日間にわたり、ビデオ撮影の練習をかねて観察を実施し、幼児たちが観察者の存在やビデオ撮影に慣れ、あまり意識しないようになった時点から観察データを収集した。

**得点化の方法** (1)ソシオメトリック指名法の得点：まず対象児ごとに同性仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。肯定的指名数と否定的指名数のそれぞれの合計数について本人を除くクラスの同性仲間数で除算し、仲間1人当たりからの指名数を算出した。その後、男女別の平均値とSDに基づいて標準得点へ変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点，否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（ $SP=L-D$ ）と社会的影響力得点（ $SI=L+D$ ）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を、D得点は仲間から積極的に拒否される程度を表す。SP得点とSI得点は合成得点であるが、SP得点は好かれる程度と拒否される程度の差を表し、SI得点は好かれるか拒否されるかにかかわらず仲間への影響力が強いことを表す。

(2)ソシオメトリック評定法の得点：対象児ごとに、同性仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を、ニュートラルな顔の箱に分類された場合に評定値2を、悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。この後、評定した仲間数で除算し、平均評定値を算出した。

(3)仲間アセスメント項目得点：L得点と同様に、項目別に同性仲間1人当たりからの指名数を算出し、それを男女別に標準得点へ変換し、各対象児の各項目得点とした。

(4)行動観察の得点：まず対象児ごとに、ビデオ記録を再生しながら観察筆録を補充整理した。次に、各対象児の筆録内容を表2の行動観察カテゴリーに基づいて26カテゴリーのいずれかに分類した。分類にあたっては、特定の行動が持続している時間の長さを無視して、特定の行動が開始され終了するまでを1単位として、その生起回数を数えた。最後に、各対象児の筆録内

表2 26項目の行動観察カテゴリーとその定義

分類カテゴリー	定	義
(1) 対象児から仲間への働きかけ		
1. 身体的・肯定的：	身体的に仲間に好意を示す。微笑む。笑う。手伝う。抱きつく。手をつなぐ。撫でる。	
2. 身体的・否定的：	身体的に敵意を示す。叩く。蹴る。つかむ。にらむ。嫌がらせをする。物や作品を壊す。物を横取りする。邪魔する。割り込む。	
3. 身体的・ニュートラル：	物を借りる（仲間の承諾を得ずに物を借りるが仲間の否定的反応はない）。模倣する。仲間の後をついていく。	
4. 言語的・肯定的：	仲間の注意を引く。仲間に質問する。仲間の指示を仰ぐ。仲間をリードする。提案する。誘う。言語的に仲間に好意を示す。ほめる。慰める。プラスの評価・強化を与える。援助・分与を申し出る。相手の承諾を得て物を借りる。仲間に援助・分与をうまく求める。依頼する。許可を求める。仲間に同意を求める。	
5. 言語的・否定的：	言語的に仲間に敵意や攻撃を示す。なじる。悪口を言う。マイナスの評価をする。仲間に命令する。強引に威圧する。	
6. 言語的・ニュートラル：	注意を与える。その他、肯定的でも否定的でもない言語的行動。	
(2) 仲間の応答		
7. 身体的・肯定的：	対象児に同調する。うなずく。同じ行動をとる。依頼・要求に積極的に従う。	
8. 身体的・否定的：	対象児に同調しない。依頼・要求を拒絶する。	
9. 身体的・ニュートラル：	自分の意志を明確にしない行動。依頼・要求に対して消極的に従う。	
10. 言語的・肯定的：	対象児に言語的に同意する。	
11. 言語的・否定的：	対象児の意見や主張に反対する。	
12. 言語的・ニュートラル：	自分の意志を明確にしない曖昧な身体的反応。	
13. 応答なし：	対象児の働きかけを無視する。応答しない。	
(3) 仲間から対象児への働きかけ (14～19)：	1～6と同様。	
(4) 対象児の応答 (20～26)：	7～13と同様。	

表3 11項目の活動の種類カテゴリーとその定義

分類カテゴリー	定 義
1. 仲間遊び：仲間と一緒に遊ぶ。	
2. 平行遊び：仲間の近くで類似した遊びをするが、相互交渉はない。	
3. 独り遊び（熱中）：独りで集中して遊んでいる。	
4. 独り遊び（非熱中）：独りで遊んでいるが、集中していない。	
5. 傍観的行動：遊んでいる仲間の近くにおいて関心をもってその様子を見ているが、活動には参加しない。	
6. 教師と接触：先生とかかわる。	
7. 観察者と接触：観察者に話しかけたり、物を見せる。	
8. 異年齢児と接触：自分より年少児や年長児とかかわる。	
9. 次の遊びの準備・移動：ひとつの遊びから別の遊びへ変わるため移動する。	
10. ビデオ意識：自分がビデオ撮影されていることを意識する。	
11. 独り言：誰かに語りかけるのではないが、声に出して話す。	

容を再度見直し、表3に示す11の活動の種類カテゴリーに基づいて分類し、各カテゴリーに該当する活動の生起回数を求めた。この場合も、活動の持続時間を無視し、特定の活動が開始され終了するまでを1単位として、その生起回数を数えた。

**群間比較の群構成の方法** 年少児時点または年中児時点におけるソシオメトリック平均評定値の標準得点（z点）が0以上の者を人気児とし、0以下の者を非人気児として分類した。表4は、年少児時点と年中児時点の分類結果を組み合わせ構成される4つの群について、その人数内訳を示したものである。以下の群間比較の分析では、この4群の中から、両時点とも人気児に分類された人→人（N=5）と逆に両時点とも非人気児に分類された非→非（N=6）の2群を取り出して比較する。

表4 対象児の分類内訳と分類基準

年少児 時点の 地位群	分 類 基 準	年中児時点の地位群					
		人 気 児			非 人 気 児		
		男	女	全体	男	女	全体
人 気 児	平均評定値の標準得点>0	4	1	5	1	2	3
非人気児	平均評定値の標準得点<0	0	4	4	4	2	6

## 結 果

### 2 群間比較の結果

(1)ソシオメトリック地位得点：表5は、年少児時点と年中児時点におけるソシオメトリック地位得点別に、人→人（N=5）と非→非（N=6）の平均値とSDを示したものである。まず年少児時点の各得点について2群間の比較をした結果、D得点では非→非群が人→人群よりも有意に多かった（ $t=3.42$ ,  $p<.02$ ）。逆に、SP得点（ $t=3.37$ ,  $p<.01$ ）、平均評定値（ $t=3.60$ ,  $p<.01$ ）および平均評定値のz点（ $t=4.39$ ,  $p<.002$ ）では、人→人群が非→非群よりも有意に多かった。

次に年中児時点の地位得点別に2群間の比較をした結果、L得点（ $t=2.52$ ,  $p<.05$ ）、平均評定値（ $t=3.20$ ,  $p<.02$ ）および平均評定値のz点（ $t=3.59$ ,  $p<.01$ ）では、人→人

表5 各群のソシオメトリック得点の平均値 (SD)

	年少児時点		年中児時点	
	人→人群 (N=5)	非→非群 (N=6)	人→人群 (N=5)	非→非群 (N=6)
L得点	0.44(1.20)	-0.91(0.21)	1.15(0.92)	-0.24(0.73)
D得点	-0.63(0.28)	0.93(0.97)	0.23(0.91)	0.49(1.59)
SP得点	1.08(1.45)	-1.83(1.14)	0.93(1.83)	-0.72(1.81)
SI得点	-0.19(0.97)	0.02(0.82)	1.38(0.11)	0.25(1.67)
平均評定値	2.56(0.09)	2.11(0.24)	2.43(0.21)	2.01(0.18)
平均評定値のz	0.75(0.47)	-1.12(0.75)	0.72(0.92)	-1.22(0.69)

群が非→非群よりも有意に多かった。これらの結果は、評定法の平均評定値のz点に基づいて分類した人→人群と非→非群が年少児時点や年中児時点の指名法の得点においても一定の相違があることを実証するものであり、ソシオメトリック地位得点において2群が明確に異なることを確認するものである。

(2)仲間アセスメントによる行動特徴：表6は年少児時点と年中児時点における仲間アセスメント得点別に、人→人群と非→非群の平均値とSDを示したものである。まず年少児時点の各得点について2群間の比較をした結果、項目1「みんなが遊んでいるとき、一人だけ何もしないで、ぶらぶらしている」( $t=3.42, p<.01$ )、項目4「お友達にえらそうに、よく命令する」( $t=3.04, p<.02$ )、項目9「お友達と、すぐに言い争いやけんかをする」( $t=5.63, p<.001$ )の3項目では、いずれも非→非群が人→人群よりも有意に多かった。同様に、項目6「一緒に遊んでいるとき、だまってどこかへ行っていなくなる」( $t=2.09, p<.10$ )、項目10「小さな声で話すので、何がしたいかわからない」( $t=2.26, p<.10$ )の2項目では、非→非群が人→人群よりも多い傾向にあった。

次に年中児時点の各得点について2群間の比較をした結果、項目5「お友達に頼まれたら、ニコニコ笑顔でいいよとすぐにしてあげる」( $t=3.92, p<.005$ )、項目11「○○ちゃんと名前を呼んでから、話しかける」( $t=9.63, p<.001$ )の2項目では、人→人群が非→非群よりも有意に多かった。逆に、項目12「プランコの順番や遊びの約束を守らない自分勝手」( $t$

表6 各群の仲間アセスメント得点の平均値 (SD)

	年少児時点		年中児時点	
	人→人群 (N=5)	非→非群 (N=6)	人→人群 (N=5)	非→非群 (N=6)
項目1	-0.78(0.35)	0.64(0.78)	-0.53(0.46)	0.24(0.81)
項目2	-0.15(0.62)	0.68(1.00)	0.30(0.91)	0.73(0.80)
項目3	0.62(0.67)	-0.19(1.02)	-0.36(0.76)	0.34(1.01)
項目4	-0.04(0.60)	1.13(0.55)	0.16(0.81)	0.89(1.15)
項目5	-0.31(0.40)	-0.72(0.43)	0.90(0.39)	-0.57(0.67)
項目6	-0.31(0.64)	0.75(0.85)	-0.44(0.51)	0.27(0.53)
項目7	-0.33(0.73)	-0.46(0.86)	1.29(0.91)	0.36(0.65)
項目8	0.48(0.93)	0.01(0.81)	-0.10(0.81)	0.26(0.56)
項目9	-0.60(0.20)	0.92(0.52)	-0.05(0.99)	0.79(0.98)
項目10	-0.66(0.33)	0.10(0.60)	-0.01(0.68)	0.12(0.53)
項目11	-0.12(0.44)	-0.82(0.67)	0.92(0.12)	-0.85(0.39)
項目12	-0.22(0.61)	0.78(1.08)	-0.66(0.44)	0.72(0.46)

=4.58,  $p < .002$ ) では非→非群が人→人群よりも有意に多く、項目6「一緒に遊んでいるとき、だまってどこかへ行っていなくなる」( $t = 2.02$ ,  $p < .10$ ) では非→非群が人→人群よりも多い傾向にあった。

(3)行動観察による行動特徴：表7は年少児時点と年中児時点における仲間相互作用の得点別に、人→人群と非→非群の平均値とSDを示したものである。なお、表2の分類カテゴリーでは「身体的」の生起回数が極めて少ないカテゴリーがあったので、表7では「身体的」と「言語的」を一括して合計得点を求め、その平均値を群別に示している。まず年少児時点の各得点について2群間の比較をした結果、「対象児から仲間への働きかけ」では肯定的( $t = 3.19$ ,  $p < .02$ )でも否定的( $t = 3.67$ ,  $p < .01$ )でも非→非群が人→人群よりも有意に多かった。また、「仲間の応答」の肯定的( $t = 2.39$ ,  $p < .05$ )では非→非群が人→人群よりも有意に多く、否定的( $t = 2.21$ ,  $p < .10$ )では非→非群が人→人群よりも多い傾向にあった。同様に、「仲間から対象児への働きかけ」の肯定的( $t = 2.23$ ,  $p < .10$ )でも、非→非群が人→人群よりも多い傾向にあった。

年中児時点の各得点についても同様の2群間比較をした結果、「対象児の応答」の肯定的( $t = 2.25$ ,  $p < .10$ )において人→人群が非→非群よりも多い傾向を示したが、他の得点では両群間に有意差は認められなかった。

表7 各群の行動観察得点の平均値(SD)

	年少児時点		年中児時点	
	人→人群 (N = 5)	非→非群 (N = 6)	人→人群 (N = 5)	非→非群 (N = 6)
(1)対象児から仲間への働きかけ				
肯定的	22.20(5.73)	38.25(8.73)	17.40(9.98)	16.83(4.44)
否定的	0.80(0.94)	6.33(2.92)	3.00(3.56)	4.67(3.67)
ニュートラル	0.60(0.49)	0.50(0.50)	4.00(4.32)	0.50(0.50)
(2)仲間の応答				
肯定的	4.20(2.94)	9.33(3.42)	3.00(2.53)	2.67(2.21)
否定的	0.60(0.49)	1.67(0.87)	0.20(0.40)	0.83(1.21)
ニュートラル	0.60(1.20)	0.50(1.12)	1.00(0.95)	0.17(0.37)
応答なし	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.00(0.00)	0.33(0.47)
(3)仲間から対象児への働きかけ				
肯定的	12.40(7.41)	24.00(8.06)	7.20(4.53)	9.17(5.34)
否定的	5.60(4.99)	3.00(3.21)	2.20(1.60)	2.67(2.59)
ニュートラル	0.60(1.20)	1.83(1.34)	0.20(0.40)	0.17(0.37)
(4)対象児の応答				
肯定的	6.00(4.11)	7.00(3.94)	3.25(1.81)	1.00(1.15)
否定的	1.60(3.20)	2.33(1.92)	0.40(0.80)	0.83(0.37)
ニュートラル	0.60(0.80)	1.00(0.82)	0.20(0.40)	0.60(0.65)
応答なし	0.20(0.40)	0.67(0.94)	0.40(0.80)	0.67(0.75)

(4)活動の種類別得点：表8は年少児時点と年中児時点における活動の種類別に、人→人群と非→非群の平均値とSDを示したものである。まず年少児時点の各得点について2群間の比較をした結果、「独り遊び(非熱中)」( $t = 3.38$ ,  $p < .05$ )、「観察者と接触」( $t = 4.32$ ,  $p < .002$ )および「独り言」( $t = 2.33$ ,  $p < .05$ )では人→人群が非→非群よりも有意に多かった。逆に、「異年齢児と接触」( $t = 5.76$ ,  $p < .005$ )では非→非群が人→人群よりも有意に多く、



表8 各群の活動種類別得点の平均値 (SD)

	年少児時点		年中児時点	
	人→人群 (N=5)	非→非群 (N=6)	人→人群 (N=5)	非→非群 (N=6)
仲間遊び	6.60(3.96)	6.83(3.41)	3.60(2.15)	3.33(4.07)
平行遊び	2.60(3.31)	9.33(6.52)	4.40(5.54)	1.50(2.29)
独り(熱中)	10.00(3.27)	12.83(4.73)	10.00(5.02)	10.50(3.30)
独り(非熱中)	20.20(6.62)	8.83(1.34)	7.40(3.14)	6.50(3.02)
傍観的行動	14.60(4.81)	11.83(3.53)	6.40(2.33)	6.17(1.21)
教師と接触	9.00(5.47)	12.50(7.22)	8.20(9.37)	6.50(6.65)
観察者と接触	18.80(6.42)	4.33(3.40)	1.40(1.89)	0.83(1.46)
異年齢児と接触	1.80(2.23)	23.50(8.05)	2.20(2.23)	3.83(4.60)
次の遊び準備	27.00(4.97)	20.00(6.38)	16.50(3.77)	12.00(4.30)
ビデオ意識	4.80(6.74)	1.00(1.15)	0.40(0.80)	0.83(1.46)
独り言	9.00(2.10)	4.83(3.08)	4.50(2.49)	2.50(2.14)

「平行遊び」( $t=1.90$ ,  $p<.10$ )では非→非群が人→人群よりも多い傾向にあった。

年中児時点の各得点についても同様の2群間比較をしたが、いずれの活動においても両群間に有意差は認められなかった。

### 同時的相関分析の結果

(1) ソシオメトリック地位得点：表9は、同時点におけるソシオメトリック地位得点間のPearson 積率相関係数をまとめたものである。年少児時点ではL得点はD得点と有意な負相関( $r=-.536$ ,  $p<.05$ )を示しているが、年中児時点では有意な相関を示していない( $r=-.247$ , ns)。また、年少児時点の平均評定値のz点はL得点( $r=.198$ )よりもD得点( $r=-.532$ ,  $p<.05$ )と高い相関を示しているが、年中児時点の平均評定値のz点は逆にD得点( $r=-.365$ )よりもL得点( $r=.612$ ,  $p<.01$ )と高い相関を示している。

表9 ソシオメトリック地位得点の同時的相関係数 (N=18)

	L得点	D得点	SP得点	SI得点	平均評定値	z点
L得点		-.536*	.873**	.459+	.085	.198
D得点	-.247		-.880**	.504*	-.377	-.532*
SP得点	.820**	-.757**		-.033	.266	.419+
SI得点	.677**	.546*	.134		-.310	-.358
平均評定値	.539*	-.412+	.607**	.154		.857**
平均評定値のz点	.612**	-.365	.629**	.252	.985**	

+ :  $p<.10$  \* :  $p<.05$  \*\* :  $p<.01$

対角線の右上側は年少児時点, 左下側は年中児時点

(2) 仲間アセスメントによる行動特徴：表10と表11は、同時点における仲間アセスメント得点間の相関係数をまとめたものである。正相関に注目すると、年少児時点では項目1「みんなが遊んでいるとき、一人だけ何もしないで、ぶらぶらしている」幼児ほど、項目6「一緒に遊んでいるとき、だまってどっかへ行っていなくなる」と仲間から見られる関係にあった( $r=.506$ ,  $p<.05$ )。また、項目2「自分の思うとおりにならないと、すぐに怒ったり、ふくれる」幼児ほど、項目9「お友達と、すぐに言い争いやけんかをする」傾向にあり( $r=.663$ ,  $p<$

表10 仲間アセスメント得点の同時的相関係数 (N=18)

	項目 1	項目 2	項目 3	項目 4	項目 5	項目 6
項目 1		.122	-.159	-.085	-.042	.506*
項目 2	.297		-.313	.260	-.462 <sup>+</sup>	.027
項目 3	.052	-.016		-.107	.452 <sup>+</sup>	-.119
項目 4	.149	.479*	-.094		-.537*	.024
項目 5	-.060	.018	.151	-.465 <sup>+</sup>		.024
項目 6	.171	-.296	.271	-.175	-.014	
項目 7	.005	.061	-.004	.319	-.017	.054
項目 8	.155	-.071	.408 <sup>+</sup>	.043	-.121	.170
項目 9	.219	.828**	.225	.747**	-.192	-.335
項目10	.087	.205	-.079	.122	-.028	.031
項目11	-.083	-.206	.103	-.145	.250	.148
項目12	.565*	.478*	.267	.464 <sup>+</sup>	-.140	.482*

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$ 

対角線の右上側は年少児時点, 左下側は年中児時点

表11 仲間アセスメント得点の同時的相関係数 (N=18)

	項目 7	項目 8	項目 9	項目10	項目11	項目12
項目 1	.063	-.104	.345	.271	.332	.184
項目 2	-.290	.439 <sup>+</sup>	.663**	.450 <sup>+</sup>	-.303	.810**
項目 3	-.005	.264	-.482*	-.504*	.078	-.046
項目 4	-.138	-.181	.241	.090	-.796**	.405 <sup>+</sup>
項目 5	.081	.077	-.281	-.135	.410 <sup>+</sup>	-.294
項目 6	-.101	-.062	.486*	.221	-.005	-.038
項目 7		-.155	-.380	-.343	.164	-.416 <sup>+</sup>
項目 8	-.068		-.062	-.326	.052	.452 <sup>+</sup>
項目 9	.103	.042		.655**	-.200	.417 <sup>+</sup>
項目10	.329	.504*	.024		-.083	.296
項目11	.298	-.444 <sup>+</sup>	-.219	-.400 <sup>+</sup>		-.249
項目12	.219	.221	.484*	.164	-.189	

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$ 

対角線の右上側は年少児時点, 左下側は年中児時点

.01), 項目12「ブランコの順番や遊びの約束を守らない自分勝手」な傾向にある ( $r = .810$ ,  $p < .01$ ) と見られる関係にあった。興味深いのは, 項目2が項目8「自分からお友達にあまり話しかけない」( $r = .439$ ,  $p < .10$ ) や項目10「小さな声で話すので, 何がしたいのかわからない」( $r = .450$ ,  $p < .10$ ) とともに正相関を示すことである。それに対して, 年中児時点では項目2, 項目4, 項目9および項目12の相互相関はいずれも高い正相関を示し, これらの4項目は類似した行動特徴を反映しているといえる。また, 年中児時点の項目8は項目10と正相関 ( $r = .504$ ,  $p < .05$ ) を示しているが, これら2項目は年少児時点のように項目2とは明確な相関を示さず, 項目2とは異なる行動特徴として見られていることがわかる。

(3)行動観察による行動特徴: 表12は, 同時点における「対象児から仲間への働きかけ」と「仲間の応答」について, 各得点間の相関係数をまとめたものである。表13は「仲間から対象児への働きかけ」と「対象児の応答」について, 同様の同時的相関係数をまとめたものである。まず表12の正相関に注目すると, 「対象児から仲間への肯定的な働きかけ」は両時点とも「仲間

の肯定的な応答」と高い相関（ともに  $r = .663$ ,  $p < .01$ ）を示している。それに対して、「対象児から仲間への否定的な働きかけ」は両時点とも仲間の「否定的な応答」（年少児時点  $r = .626$ ,  $p < .01$ ；年中児時点  $r = .558$ ,  $p < .05$ ）だけでなく、「肯定的な応答」（年少児時点  $r = .565$ ,  $p < .05$ ；年中児時点  $r = .412$ ,  $p < .10$ ）とも高い正相関を示すが、さらに年中児時点では「ニュートラルな応答」とも有意な正相関（ $r = .619$ ,  $p < .01$ ）を示している。仲間に対して「否定的な働きかけ」を多く示す幼児は、仲間から「否定的な応答」を受けるだけでなく、「肯定的な応答」や「ニュートラルな応答」も多く受ける関係にあることがわかる。

表13の正相関に注目すると、特に年少児時点の「仲間から対象児への働きかけ」では「肯定的」と「否定的」間に有意な正相関（ $r = .471$ ,  $p < .05$ ）が見られ、仲間から働きかけを受ける対象児は肯定的と否定的のどちらも、多く受けていることがわかる。「仲間から肯定的な働きかけ」を受ける対象児ほど、両時点とも「肯定的な応答」（年少児時点  $r = .890$ ,  $p < .01$ ；年中児時点  $r = .681$ ,  $p < .01$ ）や「ニュートラルな応答」（年少児時点  $r = .688$ ,  $p < .01$ ；年中児時点  $r = .477$ ,  $p < .05$ ）を多く示す関係にあるが、さらに年少児時点では「否定的な応答」（ $r = .460$ ,  $p < .10$ ）や「応答なし」（ $r = .449$ ,  $p < .10$ ）とも高い正相関を示してい

表12 行動観察得点間の同時的相関係数（N=18）

	対象児から仲間への働きかけ			仲間の応答			
	肯定的	否定的	ニュートラル	肯定的	否定的	ニュートラル	応答なし
(1)対象児から仲間への働きかけ							
肯定的		.333	-.060	.663**	.306	-.074	.064
否定的	.305		-.040	.565*	.626**	-.084	.343
ニュートラル	-.006	-.043		-.072	.345	-.053	-.077
(2)仲間の応答							
肯定的	.663**	.412+	.268		.467+	-.089	.066
否定的	-.020	.558*	-.176	.207		.163	-.206
ニュートラル	.474*	.619**	.103	.249	.000		-.099
応答なし	.241	-.135	-.098	.037	-.249	-.158	

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

対角線の右上側は年少児時点, 左下側は年中児時点

表13 行動観察得点間の同時的相関係数（N=18）

	仲間から対象児への働きかけ			対象児の応答			
	肯定的	否定的	ニュートラル	肯定的	否定的	ニュートラル	応答なし
(3)仲間から対象児への働きかけ							
肯定的		.471*	.171	.890**	.460+	.688**	.449+
否定的	.328		.025	.433+	.537*	.156	.359
ニュートラル	.230	-.209		-.069	.448+	.250	.049
(4)対象児の応答							
肯定的	.681**	.198	.189		.170	.576*	.209
否定的	.098	.307	.189	-.096		.217	.605**
ニュートラル	.477*	.065	.033	.752**	-.351		.240
応答なし	.009	.250	-.077	-.031	.204	-.072	

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

対角線の右上側は年少児時点, 左下側は年中児時点

る。それに対して、年中児時点の「仲間からの肯定的な働きかけ」は対象児の「否定的な応答」や「応答なし」とほとんど無関係である。また、年少児時点では「仲間から否定的な働きかけ」を受ける対象児ほど、「否定的な応答」( $r = .537, p < .05$ )を多く示すが、同時に「肯定的な応答」( $r = .433, p < .10$ )も多く示す関係にある。それに対して、年中児時点ではこれらの相関は有意でない。これらの点が、年少児時点と年中児時点の異なる点である。

(4)活動の種類別得点：表14と表15は、同時点における活動の種類別得点について、各得点間の同時的相関係数をまとめたものである。表14と表15から、年少児時点と年中児時点の相違点を指摘すると、まず年中児時点の「独り遊び（熱中）」は「独り遊び（非熱中）」と有意な正相関( $r = .513, p < .05$ )を示しているが、年少児時点では明確な相関を示していない( $r = -.046, ns$ )。また、年少児時点の「傍観的行動」は「教師と接触」と有意な正相関( $r = .507, p < .05$ )を示しているが、年中児時点では逆に負相関( $r = -.456, p < .10$ )を示している。年少児時点の「仲間遊び」の多い幼児ほど、「観察者と接触」( $r = -.425, p < .10$ )や「独り言」( $r = -.505, p < .05$ )が少ない関係にあるが、年中児時点ではこれらの関係は明確でない。同様に、年少児時点では「独り遊び（非熱中）」が「観察者と接触」( $r =$

表14 活動の種類別得点の同時的相関係数 (N=18)

	仲間遊び	平行遊び	独り遊び熱中	独り遊び非熱中	傍観的行動	教師と接触
仲間遊び		-.152	-.576*	-.269	.222	-.089
平行遊び	-.187		-.290	-.198	.304	.056
独り遊び（熱中）	-.372	-.605**		-.046	-.374	-.124
独り遊び（非熱中）	-.314	-.218	.513*		-.106	-.164
傍観的行動	-.112	.388	-.253	.147		.507*
教師と接触	-.095	-.182	.249	.029	-.456+	
観察者と接触	-.050	.406+	-.348	.016	-.170	.000
異年齢児と接触	-.139	.279	.136	.043	.292	-.126
次の遊び準備	-.136	-.066	.151	.237	.223	-.072
ビデオ意識	-.074	.025	.056	.322	.184	-.367
独り言	.188	-.066	.046	-.094	.102	.373

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

対角線の右上側は年少児時点、左下側は年中児時点

表15 活動の種類別得点の同時的相関係数 (N=18)

	観察者と接触	異年齢児と接触	次の遊び準備	ビデオ意識	独り言
仲間遊び	-.425+	.207	.057	-.270	-.505*
平行遊び	-.340	-.087	-.328	-.335	.129
独り遊び（熱中）	.203	-.089	-.142	.171	.220
独り遊び（非熱中）	.762**	-.297	.391	.770**	.291
傍観的行動	-.150	.211	-.234	-.313	-.073
教師と接触	-.158	-.103	-.442+	-.338	-.184
観察者と接触		-.093	.517*	.832**	.359
異年齢児と接触	-.153		-.177	-.044	-.243
次の遊び準備	.129	-.229		.383	.008
ビデオ意識	-.063	.237	-.028		.277
独り言	.011	.136	.274	-.415+	

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

対角線の右上側は年少児時点、左下側は年中児時点

.762,  $p < .01$ ) や「ビデオ意識」( $r = .770$ ,  $p < .01$ ) と、「観察者と接触」が「次の遊び準備」( $r = .517$ ,  $p < .05$ ) や「ビデオ意識」( $r = .832$ ,  $p < .01$ ) とそれぞれ有意な正相関を示すが、年中児時点ではこれらの相関は有意でない。

### 縦断的相関分析の結果

(1) ソシオメトリック地位得点：表16は、ソシオメトリック地位得点の6得点について年少児時点と年中児時点間の相関係数をまとめたものである。同一得点同士の縦断的相関値を見ると、L得点( $r = .519$ ,  $p < .05$ )、SP得点( $r = .591$ ,  $p < .01$ ) および平均評定値のz点( $r = .474$ ,  $p < .05$ ) では有意な正相関を示し、D得点では有意な傾向( $r = .400$ ,  $p < .10$ ) を示している。これらの結果から、年少児時点から約4か月間の期間を経ても同一得点の安定性は比較的高いことがわかる。

表16 ソシオメトリック地位得点の年少児時点と年中児時点間の縦断的相関係数 (N=18)

年少児時点	年 中 児 時 点					
	L得点	D得点	SP得点	SI得点	平均評定値	z点
L得点	.519*	-.486*	.637**	.080	.390	.392
D得点	-.247	.400 <sup>+</sup>	-.403 <sup>+</sup>	.090	-.507*	-.503*
SP得点	.435 <sup>+</sup>	-.505*	.591**	-.007	.512*	.512*
SI得点	.271	-.076	.228	.177	-.134	-.128
平均評定値	.300	-.118	.272	.169	.187	.276
平均評定値のz点	.263	-.371	.397	-.054	.465 <sup>+</sup>	.474*

<sup>+</sup>:  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

(2) 仲間アセスメントによる行動特徴：表17と表18は、12項目の仲間アセスメント得点について、年少児時点と年中児時点間の相関係数をまとめたものである。同一得点同士の縦断的相関値を見ると、項目2「自分の思うとおりにならないと、すぐに怒ったり、ふくれる」( $r =$

表17 仲間アセスメント得点の年少児時点と年中児時点間の縦断的相関係数 (N=18)

年少児時点	年 中 児 時 点					
	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6
項目1	-.253	-.073	.067	.362	-.126	.052
項目2	.189	.581*	.235	.671**	-.106	-.185
項目3	.054	-.458 <sup>+</sup>	-.115	-.326	.200	-.022
項目4	.084	.175	.117	.044	-.211	.280
項目5	.274	-.300	-.011	-.361	.278	-.067
項目6	-.108	.403 <sup>+</sup>	-.286	.296	-.001	.009
項目7	.045	-.319	-.220	-.220	-.103	.158
項目8	-.081	.161	-.020	.172	.129	-.483*
項目9	.251	.638**	.188	.704**	-.202	.214
項目10	.185	.479*	.551*	.421 <sup>+</sup>	.046	.124
項目11	-.297	-.239	-.020	-.189	.256	-.023
項目12	.092	.333	.283	.290	.166	-.127

<sup>+</sup>:  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

表18 仲間アセスメント得点の年少児時点と年中児時点間の縦断的相関係数 (N=18)

年少児時点	年 中 児 時 点					
	項目 7	項目 8	項目 9	項目10	項目11	項目12
項目 1	-.420 <sup>+</sup>	.138	.183	-.051	-.455 <sup>+</sup>	.081
項目 2	.443 <sup>+</sup>	-.194	.779**	.116	-.094	.534*
項目 3	.091	.095	-.460 <sup>+</sup>	-.025	.178	-.257
項目 4	.365	-.094	.168	.046	-.209	.284
項目 5	-.409 <sup>+</sup>	.145	-.384	-.224	.066	-.197
項目 6	-.302	.199	.271	.292	-.565*	.237
項目 7	-.021	.168	-.472*	.560*	-.127	-.213
項目 8	.190	-.314	.256	-.103	.268	-.105
項目 9	.152	.076	.711**	.088	-.286	.834**
項目10	-.029	.323	.650**	.058	-.238	.463 <sup>+</sup>
項目11	-.513*	-.110	-.258	-.239	.262	-.283
項目12	.247	-.407 <sup>+</sup>	.519*	-.206	-.052	.310

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$ 

.581,  $p < .05$ )と項目9「お友達と、すぐに言い争いやけんかをする」( $r = .711$ ,  $p < .01$ )の2項目だけが有意な正相関を示し、これらの行動特徴は年少児時点から年中児時点にかけて一貫していることがわかる。しかし、他の行動特徴については有意な相関は見られない。また、年少児時点の項目2、項目9および項目10「小さな声で話すので、何がしたいのかわからない」は、年中児時点の項目2や項目9だけでなく、項目4「お友達にえらそうに、よく命令する」(順に  $r = .671$ ,  $p < .01$ ;  $r = .704$ ,  $p < .01$ ;  $r = .421$ ,  $p < .10$ )や項目12「ブランコの順番や遊びの約束を守らない自分勝手」(順に  $r = .534$ ,  $p < .05$ ;  $r = .834$ ,  $p < .01$ ;  $r = .463$ ,  $p < .10$ )とも有意な正相関または有意水準に近い高い正相関を示している。

(3)行動観察による行動特徴：表19は、「対象児から仲間への働きかけ」と「仲間の応答」について、年少児時点と年中児時点間の相関係数をまとめたものである。表20は「仲間から対象児への働きかけ」と「対象児の応答」について、同様の縦断的相関係数をまとめたものである。まず同一得点同士の縦断的相関値を見ると、「仲間から対象児への否定的な働きかけ」が最も

表19 行動観察得点の年少児時点と年中児時点間の縦断的相関係数 (N=18)

年少児時点	年 中 児 時 点						
	対象児から仲間への働きかけ			仲間の応答			
	肯定的	否定的	ニュートラル	肯定的	否定的	ニュートラル	応答なし
(1)対象児から仲間への働きかけ							
肯定的	.437 <sup>+</sup>	-.046	-.023	.088	-.007	-.034	.648**
否定的	.168	.053	-.122	.274	.201	-.182	.391
ニュートラル	-.084	-.115	.030	-.077	-.178	-.048	.582*
(2)仲間の応答							
肯定的	.252	.157	-.140	-.130	.136	.110	.485*
否定的	.121	-.210	-.221	-.103	-.135	-.236	.597**
ニュートラル	.323	-.135	.021	.005	-.228	.041	-.183
応答なし	-.071	-.120	-.018	.080	.405 <sup>+</sup>	-.086	-.108

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

表20 行動観察得点の年少児時点と年中児時点間の縦断的相関係数 (N=18)

年少児時点	年 中 児 時 点						
	仲間から対象児への働きかけ			対象児の応答			
	肯定的	否定的	ニュートラル	肯定的	否定的	ニュートラル	応答なし
(3)仲間から対象児への働きかけ							
肯定的	.421 <sup>+</sup>	.278	.258	.126	.074	.426 <sup>+</sup>	.202
否定的	.141	.762**	.167	.016	.113	.041	.318
ニュートラル	.113	-.191	.366	.105	.307	.302	.193
(4)対象児の応答							
肯定的	.174	.208	.137	-.098	-.014	.207	.095
否定的	.281	.557*	.128	.479*	.196	.512*	.509*
ニュートラル	.439 <sup>+</sup>	-.172	.586*	.342	.000	.465 <sup>+</sup>	.041
応答なし	.491*	.400 <sup>+</sup>	.000	.277	.000	.361	.700**

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

高い正相関 ( $r = .762$ ,  $p < .01$ ) を示し、次いで「対象児の応答なし」( $r = .700$ ,  $p < .01$ ), 「対象児のニュートラルな応答」( $r = .465$ ,  $p < .10$ ), 「対象児から仲間への肯定的な働きかけ」( $r = .437$ ,  $p < .10$ ), 「仲間から対象児への肯定的な働きかけ」( $r = .421$ ,  $p < .10$ ) と続いている。年少児時点において「否定的な応答」が多い対象児ほど、年中児時点では「仲間から否定的な働きかけ」を多く受ける関係 ( $r = .557$ ,  $p < .05$ ) にある。興味深いのは、年少児時点において「肯定的な応答」よりも「ニュートラルな応答」や「応答なし」を多く示した対象児ほど、年中児時点では「仲間から肯定的な働きかけ」を多く受ける関係 (順に  $r = .439$ ,  $p < .10$ ;  $r = .491$ ,  $p < .05$ ) にあることである (表20参照)。

(4)活動の種類別得点：表21と表22はそれぞれの活動別得点について、年少児時点と年中児時点間の相関係数をまとめたものである。同一得点同士の縦断的相関値を見ると、「独り言」( $r = .607$ ,  $p < .01$ ) と「平行遊び」( $r = .533$ ,  $p < .05$ ) が有意な正相関を示しているだけであり、他の相関値は全般に低い。これらの結果から、年少児時点から年中児時点にかけて活動得点の安定性は全般に低いことがわかる。

表21 活動の種類別得点の年少児時点と年中児時点間の縦断的相関係数 (N=18)

年少児時点	年 中 児 時 点					
	仲間遊び	平行遊び	独り遊び熱中	独り遊び非熱中	傍観的行動	教師と接触
仲間遊び	-.134	.158	-.102	.175	.002	-.370
平行遊び	.088	.533*	-.160	-.143	.255	.097
独り遊び (熱中)	.276	-.322	-.016	-.536*	-.056	-.026
独り遊び (非熱中)	-.074	.027	-.289	.235	.276	-.108
傍観的行動	-.064	.786**	-.550*	-.153	.121	-.118
教師と接触	-.128	.211	-.016	-.217	-.386	.332
観察者と接触	.138	-.223	-.236	.049	.168	-.178
異年齢児と接触	-.272	.026	.101	.256	.139	-.136
次の遊び準備	.106	-.141	.039	.338	.267	-.397
ビデオ意識	-.022	-.212	-.234	.157	.276	-.208
独り言	.385	-.088	-.123	.046	-.003	.043

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

表22 活動の種類別得点の年少児時点と年中児時点間の縦断的相関係数 (N=18)

年少児時点	年 中 児 時 点				
	観察者と接触	異年齢児と接触	次の遊び準備	ビデオ意識	独り言
仲間遊び	-.253	-.075	-.094	.423 <sup>+</sup>	-.685**
平行遊び	.265	.213	.355	-.153	.184
独り遊び (熱中)	-.142	-.145	-.205	-.252	.386
独り遊び (非熱中)	.425 <sup>+</sup>	-.211	.334	.129	.234
傍観的行動	.464 <sup>+</sup>	.125	-.376	-.022	-.340
教師と接触	.275	.049	-.553*	-.181	-.360
観察者と接触	.310	-.082	.180	-.144	.266
異年齢児と接触	.079	-.024	-.028	-.170	-.308
次の遊び準備	-.134	.344	.280	.392	.120
ビデオ意識	.198	-.107	.184	.026	.147
独り言	.321	-.004	-.008	-.303	.607**

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

## 考 察

### 2 群間比較から

表5から、人→人群と非→非群は群分類に使用したソシオメトリック地位得点において異なる2群であることが確認された。そこで、表6の仲間アセスメントによる行動特徴から、これら2群間の特徴差を検討する。まず年少児時点では、非→非群の否定的な行動特徴が人→人群よりも顕著であった。非→非群は項目1「みんなが遊んでいるとき、一人だけ何もしないで、ぶらぶらしている」のように目的意識のない単独行動が多く、仲間とかかわる場面では項目4「お友達にえらそうに、よく命令する」や項目9「お友達と、すぐに言い争いやけんかをする」のように支配的・攻撃的な行動を示しやすく、項目6「一緒に遊んでいるとき、だまってどっかへ行っていなくなる」のように気まぐれな行動を示すと仲間から見られていた。これらの行動は、仲間との協調的な関係や持続的な仲間遊びの展開を阻害し、仲間にとって迷惑な行動であるため、こうした行動特徴は年少児の仲間からでも容易に気づかれやすいのであろう。

ところが年中児になると、仲間は非→非群の否定的な行動特徴に注目するだけでなく、人→人群の肯定的な行動特徴の側面にも気づくようである。たとえば、人→人群は項目5「お友達に何か頼まれたら、ニコニコ笑顔でいいよとすぐにしてあげる」や項目11「○○ちゃんと名前を呼んでから、話しかけてくれる」のように、友好的・協調的な仲間関係や仲間遊びを築くのに必要な社会的スキルを発揮していると仲間から見られている。それに対して、非→非群は相変わらず、項目6「一緒に遊んでいるとき、だまってどっかへ行っていなくなる」や項目12「ブランコの順番や遊びの約束を守らない自分勝手」のように、自分勝手な気まぐれな行動や仲間遊びの社会的ルールを無視した行動を示すと仲間から見られている。こうした行動は、仲間から好まれる行動ではないため、非→非群の人気度は年中児時点でも相変わらず低いのではないかと考えられる。

表7の行動観察による行動特徴では、仲間アセスメントによる行動特徴の2群間差とは少し様相が異なっていた。年少児時点の非→非群は、確かに仲間に対して「否定的な働きかけ」を



多く示し、非→非群の対象児の働きかけに対して仲間も「否定的な応答」を多く示す傾向にあった。これらの結果は、非→非群の仲間相互作用が否定的な関係にあることを示唆するものであり、非→非群の仲間アセスメントの行動特徴と合致するものである。しかし、非→非群は仲間に対して「肯定的な働きかけ」も多く、仲間から「肯定的な応答」や「肯定的な働きかけ」も多く受けていた。これらの結果は、非→非群の仲間アセスメントの行動特徴とは一致しない結果である。こうした非→非群の矛盾した結果は、どのように解釈すべきであろうか。

仲間アセスメントによる行動特徴は、多くの幼児から得られた情報を集約したものである。しかし、それぞれの行動特徴の生起回数や頻度を答えさせたものではなく、それぞれの行動特徴を顕著に示す仲間を指摘させたものである。したがって、仲間アセスメントの各項目得点は他の行動特徴とは無関係に、それぞれの行動特徴に関する幼児の質的評価を求めたことになるのかもしれない。それに対して、本研究の行動観察では肯定的または否定的な働きかけや応答の生起回数を求めている。したがって、行動観察の得点は、それぞれの行動特徴の量的評価を反映していると考えられる。質的指標か量的指標かの相違が、仲間アセスメントと行動観察の結果に不一致を引き起こしている可能性がある。

もう1つの可能性として、仲間関係や仲間の評価に与える影響は、否定的な働きかけや応答の方が肯定的な働きかけや応答よりも強いのではないかという点が挙げられる。表7の年少児時点からわかるように、人→人群でも非→非群でも、否定的な働きかけや否定的な応答の生起回数は、肯定的な働きかけや肯定的な応答よりもはるかに少なかった。しかし、否定的な行動はトラブルや対立を引き起こし、感情的な不快感を伴うので、回数が少なくても仲間に与える影響や印象は肯定的な行動よりも強いかもしれない。そう考えると、全般に生起回数が少ない否定的な働きかけや応答でも、それを相対的に多く示す非→非群が人→人群よりも仲間アセスメントでは攻撃的特徴を示しやすい幼児として仲間から指摘される事実をうまく説明できる。

これらの問題を解決するためには、行動観察の量的分析と同時に質的分析を行い、両分析結果がどの程度対応するのか、あるいはどのような行動特徴において両分析結果が異なるのかを明らかにする研究が求められる。また、肯定的な相互作用と否定的な相互作用の間にどの程度の差があるとき、肯定的な相互作用は数少ない否定的な相互作用によって相殺されるのか、あるいは否定的な評価の方が上回る結果を招くのかについても、今後明らかにしなければならない。

### 相関係数の結果から

表10と表11の仲間アセスメントの同時的相関から、有意または有意傾向を示した相関値の数を数えると、年少児時点では18個であり、年中児時点では13個である。この結果を見る限り、仲間アセスメントは年少児でも実施可能であり、その結果がある程度信頼できることがわかる。ただし、年少児時点では、いくつか予想外の相関も見られた。それらは、次の得点間の正相関である。項目2「自分の思うとおりにならないと、すぐに怒ったり、ふくれる」と項目8「自分からお友達にあまり話しかけない」の間 ( $r = .439, p < .10$ )。項目2と項目10「小さな声で話すので、何がしたいのかわからない」の間 ( $r = .450, p < .10$ )。項目6「一緒に遊んでいるとき、だまってどっかへ行っていなくなる」と項目9「お友達と、すぐに言い争いやけんかをする」の間 ( $r = .486, p < .05$ )。項目8「自分からお友達にあまり話しかけない」と項

目12「ブランコの順番や遊びの約束を守らない自分勝手」の間 ( $r = .452$ ,  $p < .10$ )。項目9「お友達と、すぐに言い争いやけんかをする」と項目10「小さな声で話すので、何がしたいのかわからない」の間 ( $r = .655$ ,  $p < .01$ )。それに対して、年中児時点の相関値で予想外だったのは、項目3「一緒に遊びたいときに、入れてと上手に頼んだり、おもちゃを貸してほしいときに、貸してねと上手に言える」と項目8「自分からお友達にあまり話しかけない」の間 ( $r = .408$ ,  $p < .10$ ) の1つだけであった。

項目8と項目10の2項目は、幼稚園の年中児や年長児を対象とした先行研究(前田, 1996; 前田・片岡, 1993)の結果を参考にして、恥ずかしがりや引込み思案傾向をとらえる項目として用意したものであった。しかし、本研究の年少児は、これらの項目内容を項目2や項目9などの攻撃的特徴と類似した行動特徴として受け止めていたように思われる。それに対して、年中児時点の項目8は項目10と有意な正相関 ( $r = .504$ ,  $p < .05$ ) を示し、2つの項目を類似した行動特徴として見ていた。これらの相違が仲間アセスメントの縦断的相関にもあらわれているように思われる。表17と表18を見ると、年少児時点の項目10は年中児時点の項目2「自分の思うとおりにならないと、すぐに怒ったり、ふくれる」( $r = .479$ ,  $p < .05$ )、項目4「お友達にえらそうに、よく命令する」( $r = .421$ ,  $p < .10$ )、項目9「お友達と、すぐに言い争いやけんかをする」( $r = .650$ ,  $p < .01$ )、項目12「ブランコの順番や遊びの約束を守らない自分勝手」( $r = .463$ ,  $p < .10$ ) と高い正相関を示している。おそらく、これらの結果は年少児が項目10の行動特徴を自分勝手な行動や攻撃的行動の側面をあらわすものと見ていることから生じたものと考えられる。

表12と表13の行動観察による行動特徴の同時的相関からわかるように、「対象児から仲間への肯定的な働きかけ」は「対象児から仲間への否定的な働きかけ」と有意ではないが正相関の関係にあった。同様に、「仲間から対象児への肯定的な働きかけ」と「仲間から対象児への否定的な働きかけ」の相関は年少児時点では有意な正相関 ( $r = .471$ ,  $p < .05$ ) を、年中児時点でも有意ではないが正相関 ( $r = .328$ , ns) を示している。これらの結果を考慮すると、表20の縦断的相関に見られた「仲間から対象児の働きかけ」の肯定的 ( $r = .421$ ,  $p < .10$ ) や否定的 ( $r = .762$ ,  $p < .01$ ) の正相関は、必ずしも肯定的な働きかけと否定的な働きかけをする幼児が別の子どもであるとは限らないことを示唆する。おそらく、どちらも多いタイプ、どちらも少ないタイプの幼児が混在しているのではないかと考えられる。残念ながら、本研究では対象児数が少ないので、これらのタイプを分類して直接比較することができない。今後の縦断的研究では、「肯定的な働きかけや応答」と「否定的な働きかけや応答」のどちらも多いタイプの幼児、どちらか一方が多いタイプの幼児、あるいはどちらも少ないタイプの幼児を行動観察の結果から分類し、それぞれのタイプの仲間関係や仲間相互作用のあり方が時間経過に伴ってどのように異なるかを明らかにする必要がある。

ところで表7からわかるように、「仲間の応答」や「対象児の応答」のほとんどは肯定的または否定的な応答で占められている。「ニュートラルな応答」や「応答なし」の生起回数は極めて少ない。しかし、表19や表20の縦断的相関あるいは表12や表13の同時的相関では、「ニュートラルな応答」や「応答なし」がいくつかの他の得点と有意な正相関を示している。これらの結果は、表7から示唆されるように、「ニュートラルな応答」や「応答なし」の生起回数が少ない範囲の中で得られたものであることに留意しなければならない。

表21と表22の縦断的相関では有意な相関値が少なかった。しかし、有意な相関値が見られた

関係を検討すると、全般に予想できる関係であるといえる。それらを列挙すると、次のとおりである。年少児のとき平行遊びの多い者は年中児になっても平行遊びが多い ( $r = .533$ ,  $p < .05$ )。年少児のとき独り遊び(熱中)の多い者は年中児になると、独り遊び(非熱中)が少なくなる ( $r = -.536$ ,  $p < .05$ )。年少児のとき傍観的行動が多い者は年中児になっても平行遊びが多く ( $r = .786$ ,  $p < .01$ )、独り遊び(熱中)が少なくなる ( $r = -.550$ ,  $p < .05$ )。年少児のとき仲間遊びの多い者は年中児のとき独り言が少ない ( $r = -.685$ ,  $p < .01$ )。年少児のとき教師と接触することの多い者は年中児のとき次の遊びの準備や移動が少ない ( $r = -.553$ ,  $p < .05$ )。予想外の相関は、年中児時点の同時的相関において独り遊び(熱中)が独り遊び(非熱中)と有意な正相関 ( $r = .513$ ,  $p < .05$ )を示したことである(表14参照)。これは、おそらく観察カテゴリーに分類するときの問題と関連していると思われる。すなわち、独りで自分の活動に熱中している最中は観察者から独り遊び(熱中)と認識できるが、活動には熱心に従事していないが、遊びのイメージや遊びの展開を考えるのにエネルギーを熱中させている場合には、独り遊び(非熱中)と分類される可能性があるからである。この点は今後の行動観察で留意すべき点であるが、その他の相関結果は本研究の活動別の行動観察カテゴリーが各子どもの行動特徴をとらえるのに有効であることを実証するものといえる。

#### 引用文献

- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59. Cambridge: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤(監訳) 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ— pp. 14-62. 北大路書房
- Goldman, J. A., Corsini, D. A., & deUrioste, R. 1980 Implications of positive and negative sociometric status for assessing the social competence of young children. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 1, 209-220.
- Hartup, W. W., Glazer, J. A., & Charlesworth, R. 1967 Peer reinforcement and sociometric status. *Child Development*, 38, 1017-1024.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. J. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*. Vol. 2, pp. 251-297. Greenwich: JAI Press.
- LaGreca, A. L., & Stark, P. 1986 Naturalistic observations of children's social behavior. In P. S. Strain, M. J. Guralnick, & H. M. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. pp. 181-213. New York: Academic Press.
- 前田健一 1996 幼児の仲間関係に関する研究—社会的行動特徴に関する仲間・実習生アセスメントの縦断的分析— 愛媛大学教育学部紀要 教育科学 第42巻第2号, 79-96.
- 前田健一・泉あかね 1994 幼児の仲間関係に関する研究—仲間相互作用の行動観察分析— 愛媛大学教育学部紀要 教育科学 第40巻第2号, 45-55.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, 41, 152-160.
- Masters, J. C., & Furman, W. 1981 Popularity, individual friendship selection, and specific peer interaction among children. *Developmental Psychology*, 17, 344-350.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. 1993 Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.
- Vaughn, B. E., & Waters, E. 1981 Attention structure, sociometric status, and dominance: Interrelations,

behavioral correlates, and relationships to social competence. *Developmental Psychology*, 17, 275–288.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属幼稚園の先生方並びに園児の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集と整理にあたって援助いただいた女子大学生の皆さんに感謝申し上げます。本研究の一部は文部省科学研究費補助金（平成8年度～平成10年度）基盤研究C2課題番号08610135の援助によるものである。